

逆接を表す談話標識：対人関係調整機能と応答詞的機能

松 尾 文 子

要 旨

As Schiffrin (2001/2004) pointed out, discourse markers are one set of linguistic items that function in cognitive, expressive, social and textual domains. This paper discusses adversative discourse markers, which have interpersonal and response-like functions. From the core function ‘adversative,’ an interpersonal function can be derived. When this function is foregrounded, discourse markers are often used as a politeness marker. The propositional and logical adversative function can be developed into an attitudinal or emotional adversative function, which I call a response-like function.

キーワード：談話標識 逆接 対人関係調整機能 応答詞的機能

1. はじめに

本稿では、逆接を表す談話標識の対人関係調整機能 (interpersonal function) と、感情を表す応答詞的機能を論ずる。この談話標識では、逆接を表す基本用法をベースに、対人関係を調整する機能が展開している。その意味でこの談話標識は、聞き手との関係を配慮した話し手と聞き手の相互作用的表現であると言える。また、基本用法である内容的・論理的な逆接から「感情の逆接」とも言える応答詞的機能が派生する。

Schiffrin (1987: 31) では談話標識を “sequentially dependent elements that bracket units of talk” (談話単位をカッコでくくって (区切って)、前の要素に連続的に制約を受けるもの) と定義した。そして、談話の文脈的な調整を担う談話標識は、Ideational Structure (観念構造)、Action Structure (発話行為構造)、Exchange Structure (発話交換構造)、Participation Framework (参加者の枠組み)、Information State (情報状態) の5つのレベル (plane) の単一、あるいは複数のレベルで機能するとした。¹

Schiffrin (2001/2004) では、談話標識のこのようなテキスト内の指示機能を拡大して、談話

標識を“one set of linguistic items that function in cognitive, expressive, social, and textual domains” (p.54) (認知的・表出的・社会的・テキスト構成的な領域で機能する一連の言語項目) であるとする。さらに、談話標識はそれを使う者の“cognitive, expressive, social, and textual competence” (p.67) (認知的・表出的・社会的・テキスト構成的な能力) を示す要素でもある。認知的能力 (ability) とは、言語を通して概念や思考を表現する力、表出的能力とは、言語を使って個人として、及び社会的なアイデンティティを示し、態度を表明して何らかの行為を行う力、社会的能力とは、自己と他者との関係を調整する力、テキスト的能力とは、単一の文より大きな言語単位内で形式を整えて意味を伝達する力のことを言う。逆接を表す談話標識の対人関係調整機能は社会的能力、応答詞的機能は表出的能力と関連がある。

メイナード (2004: 196) は、接続表現は先行するディスコースとの結束性を指標するばかりでなく、主体と相手の接触の仕方を示すとする。また、Biber et al. (1999: 1045, 1047, 1083) は、会話は2人以上の参加者によって組み立てられる相互性 (interactive) という特徴を持ち、“expressive of politeness, emotion, and attitude” (ポライトネス、感情、態度の表出) であるとする。この politeness は、対人関係に関する要素である。談話標識はこのような会話の相互性に貢献する。

対人関係の調整が重要となるのは、話し手が相手の期待や予想に反することを伝える場合である。その意味で、逆接の談話標識では、コミュニケーションにおいて興味深い用法が見られる。

2. 間主観化と認知言語学的観点

近年、歴史語用論の立場からの談話標識研究が進んでいる。Jucker (1995) によって事実上名称が定着した「歴史語用論」(Historical Pragmatics) は、社会構造の変化に伴って言語を用いる状況が変化することで、言語使用がどのように変化するかを分析する。そのためには過去の言語資料が必要であるが、古英語から近代英語までの様々なジャンルのテキストを集めたヘルシンキコーパス (Helsinki Corpus of English Texts) をはじめとするコーパスの発達が言語資料の提供に貢献している。コーパスデータを通時的に観察することで、言語使用が時間の経過とともにどのように変化し発達したかを記述できる。このような手法で談話標識を通時的に観察して意味の発達を見る研究が、歴史語用論の分野の中の文法化 (grammaticalization) ・主観化 (subjectification) ・間主観化 (intersubjectification) のトピックとして定着した (高田他 2011: 30-31, 75)。ここでは、談話標識の機能を論ずる上で重要な概念である主観化と間主観化を取り上げる。

主観化とは高田他 (2011: 23, 75) によると、1つの語の意味において、話し手の主観的態度・判断・意味が強まるプロセスで、もともと単に客観的な意味を示していた語が、語が用いら

れる歴史の中で、次第に話し手自身の主観的判断・観点・意味を表すようになる意味の発達のことを言う。² 間主観化は、主観化を基盤にして、さらにコミュニケーション（相互作用）の中で用いられる機能・意味を帯びて行く変遷である（高田他 2011: 32-33, 75）。³ Traugott (2011: 60) で述べられているように、間主観化には聞き手との社会的やりとりを維持したいという話し手の願望 (maintain social exchange with the Addressee) が関係している。この観点からすると、たとえば談話標識の well のためらいを表す機能は、発話の内容を和らげる垣根表現であり、間主観化の一例であると言える（高田他 2011: 67）。さらに、談話標識が用いられる文での位置と主観化・間主観化の関係も論じられ始めている。本稿では、文尾で用いられる逆接の談話標識に関しても述べる。

また近年、日本語の談話標識（接続表現と言われる場合もある）を認知言語学的観点から分析する例も見られる。メイナード (2004: 204) は「だから」に関して以下のように述べている。
 〈X だから Y〉において、「だから」は論理的な原因—結果という正当化および帰結関係を基盤に、状況 X と状況 Y が何らかの関係があることを知らせる。物事の論理的関係を前景化する場合は、ある物事の状況の正当化および帰結関係を表す。一方、主体が発話行為に注目して欲しいという意図を表す場合には、従来の〈原因—結果〉という意味がそのディスコースの発話行為のレベルに拡大する。感情的な側面や対人関係が前景化されるのである。

この道筋で、萩原 (2012) は「でも」の使用に関して、論理的記号・標識の機能より、話し手の心理（感情・意図・態度など）が前面に押し出される感情の前景化がなされているとする。この見解を援用すると、英語の逆接の談話標識に関して、従来「聞き手の予想や期待に反すること・聞き手にとって都合がよいことをこれから述べると予め知らせることで、一種の丁寧表現として機能する」と記述されてきた用法は、「逆接の関係」を基盤に、論理関係よりも対人関係が前景化されたものであると説明出来る。また、感情的な側面が前景化されると応答詞的用法になる。

3. 対人関係調整機能を担う場合

本節では、対人関係調整機能を持つ逆接の談話標識 actually と though の例を示す。まず、actually がどのように対人関係調整機能を担っているかを見る。

次例は、アメリカ大統領と国家偵察局局長 Rachel のテレビを通しての会話である。大統領はホワイトハウスにいて、Rachel は遠く離れた場所にいる。ホワイトハウスのスタッフに対してある出来事に関する概説をするように大統領が指令を下している。

(1) The President shook his head. "I'm afraid I didn't make myself clear. You'll be

doing the briefing from where you are via video conference.” “Oh.” Rachel hesitated. “What time did you have in mind?” “*Actually*,” Herney said, grinning. “How about right now? Everyone is already assembled, and they’re staring at a big blank television set. They’re waiting for you.” Rachel’s body tensed. “Sir, I’m totally unprepared. I can’t possibly—”—Brown, *Deception* (大統領は首を横に振った。「私の説明が分かり難かったらしいな。君にはそこからテレビ会議で状況を説明してもらおう」「そうですか」レイチェルはたじろいだ。「何時頃をお考えでしょうか?」「それだな」ハーニー（大統領）はにんまりとして言った。「今からはどうだろうか？すでに全員が集まって、大型テレビの黒い画面をじっと見ている。君を待っているのだよ」レイチェルは緊張した。「準備は全くできていません。とてもそんなこと—」)

actually によって、相手にとって予想外の、しかも不利なことを述べることを予告している。

“*Actually*,” と言った後、大統領はにんまりと笑い (grin), 一瞬相手の反応を伺う。actually によって、Rachel は良からぬことを聞くのだろうと予想がつき、不安な状態に置かれる。この例では actually によって相手に不利な情報を提示することを予告する気遣いを示す一方で、相手を不安にさせる結果になっていて、ある意味非常に効果的な表現である。

多くの場合、actually は相手にとって予期しない情報を伝える時に、唐突さを避けるために会話の方策として用いられる。次例の Mitch は Avery のことを知らない。

(2) MITCH: I’m sorry. Can I help you?

AVERY: *Actually* I think I’m here to help you. I’m Avery Tolar, your designated mentor. Let’s go to lunch.—*Firm* [映画台本] [自分のオフィスの入り口に立っている男を見て] (「すみません。何かご用でしょうか?」「実は君の力になろうと思って来たのだが。私はエイヴァリー・トララー、君の担当教官だ。昼ごはんに行こうか」)

初対面の相手に突然、“I’m here to help you.” と告げるのは余りにも唐突で無礼である。そこで、これから相手が予期しないことを述べることを伝える actually で発話を始めている。ここでは、断定を和らげる I think と共起していることに注意されたい。

actually はこれから相手にとって予期しない、通例好ましくない情報を提示することを合図するので、しばしばためらいを表す談話標識 well と共に用いられる。

(3) QUEEN MARIE: Who dear?

HENRY: Countess Nicole De Lancret. She's a cousin of... *Well, actually*, I don't know who her cousin is. Surely you have heard of her?—*Ever* [映画台本] (「誰ですって?」「ニコール・ド・ランクレ伯爵令嬢です。彼女は誰かのいところで…あ、実は誰がいとこか私は分からないのです。彼女のすることをお聞き及びだと思うのですがね?」)

ここでは、話し手は相手の質問に対して十分な答ができないことを、“*Well, actually,*”で予告している。他に、謝罪を表す文の前置き表現や訂正、反対意見の表明で用いられる。特に反対意見の表明では、4で述べるように文尾でも用いられる。

“*Well, actually*”が独立して用いられる場合、もはや論理的・命題的な内容を表す機能はなく、対人関係を調整する機能のみを果たすようになる。次例の Anya は皇女 Anastasia で、過去の記憶を失っている。Dimitri は皇女を利用して金もうけを企んでいる。

(4) DIMITRI: Now, let me ask you something, Anya. Was it... there's a last name that goes with that?

ANYA: *Well, actually*. This is gonna sound crazy. I don't know my last name. I was found wandering around when I was eight years old.—*Anastasia* [映画台本] (「ちょっと聞いてもいいかな、アーニャ。そのう…アーニャに続く苗字はないの?」「ええっと、実はね。変だと思うだろうけど、苗字を知らないの。8歳の時に浮浪児だったところを見つけられたの」)

自分の姓を知らないということは、普通はあり得ないことである。しかも、Dimitri に策略があるにせよ Anya に対して遠慮がちに姓を尋ねている。そこで、「姓を知らない」ことを伝えるに当たって、Dimitri に対する気遣いをしている。コミュニケーションの場で生じた間主観的な機能、論理的な関係ではなく対人関係が前景化された機能を *actually* が担っているのである。

次に、*though* の例を見る。*though* を類義語の *but* と比べると、*but* が文頭で用いられた場合に生ずる挑戦的なニュアンスを *though* によって避けることが可能で、先行発話の内容に部分的に同意していることを暗示できる [Bell 1998: 535]。話し手が自分自身の発話に対して自信を持って断定できない、あるいは意図的に断定しないという判断の留保の姿勢を示す。例を見よう。

(5) “Hello, good buddy,” Tarrance said. “How's the tuckin'?” “Wonderful. *I think I prefer the bus, though.*” —Grisham, *Firm* (「やあ、相棒」タランスは言った。「ト

ラックに乗らないかい?」「それはいいな。バスの方が好みなんだがなぁ」)

ここでは、相手の誘いを完全に拒否して関係を悪くすることなく、同時に自分の主張も述べるために *though* を用いている。(5) のように、*I think* や *I'm not sure* のような垣根表現と共起する場合がある。

次例では、*though* が疑問文で用いられている。Quaid は建設現場作業員で、旅行の記憶を売るといふ会社にやって来て、「秘密諜報員として火星を旅する」コースを選択した。McClane は旅行会社の社員である。

(6) McCLANE: All right, while you fill out this questionnaire, I'm going to familiarize you with some of our options.

QUAID: No options.

McCLANE: Whatever you say. Can I ask you just one question, *though?*—*Total* [映画台本] (「それではこの質問書に記入していただく間に、オプションの詳細い説明をいたします」「オプションはいらない」「分かりました。ただ、1つだけお尋ねてよろしいですか?」)

ここで仮に *but* を用いると客に対して正面切って反論することになるが、*though* によってそのニュアンスが和らげられて丁寧表現となり、客と店員という関係を保つことができる。

though が *but* と共起することがある。

(7) KENNY: You sleeping?

PRESIDENT: No. Not much. *But*, I slept last night, *though*, you know.—*Days* [映画台本] (「ちゃんと眠ってますか?」「いいや、あまり。だが、昨夜は眠れたよ」)

(8) JACK: Three o'clock's a late lunch.

TESS: Well, it's not exactly lunch, *but* there will be food there, *though?*—*Girl* [映画台本] (「3時は遅い昼食だな」「あ、う、昼食じゃないわ。でも、食事はあるでしょうね?」)

(9) CHUCK: I would have landed on the rocks, broken my leg, or my back, or my neck, bled to death. *But*, it was the only option I had at the time, *though?* Okay?—*Cast* [映画台本] (「俺は脚や背中や首を折ったり、血だらけになって死んで、岩に打ち上げられていたかもしれない。でも、それがその時に俺に許さ

れたたった1つの選択肢だったんだよ。分かるか?」)

いずれの例でも、*though* を付加することで話し手の見解が断定的に示されるのではなく、聞き手との良好なつながりを保とうとする話し手の態度が表されている。(7) では *you know* によって聞き手の大統領補佐官の Kenny に安心感を与え、(8) (9) では疑問文にすることで聞き手側の反応を求めている。(9) ではさらに、“Okay?” も用いられていることに注意されたい。*though* はまた、会話で応答詞的に用いられる。

(10) “Murder is usually depressingly simple.” “Not always, *though*.”—Cornwell, *Body*
 (「殺人はたいてい、うんざりするほど単純だ」「いつもそうとは限らないけどね」)

though を用いる話し手は、先行発話で述べられる見解に不賛成であることを示すが、同じく応答詞的な *but* を用いるよりも、不賛成のニュアンスの強さが和らげられ、相手を気遣う気持ちが伺える [Haselow, p.3604; Biber et al., p.888].

4. 文尾で用いられる場合

Traugott (2011) は、法副詞の *surely* と *no doubt* を例に真実性 (certainty) を表す副詞と文における位置と機能の関係を論じている。そこで *peripherarity* (周辺性=文頭・文尾という位置) と主観性・間主観性に触れ、“Expressions at left periphery are likely to be subjective, those at right periphery intersubjective.” (文頭に生じる表現は主観的、文尾に生じる表現は間主観的である傾向がある) と述べ、この傾向は多くの言語で見られるとする (p.63)。文頭 (left periphery) は伝えたいメッセージが始まる前に、メッセージの開始点であることを表す位置であり、*topic marker* や、*besides* や *anyway* のような話し手のスタンスを表す接続語で当該の節をフレームづけするのみならず、先行談話との関係も表すものが用いられる。文尾 (right periphery) はメッセージの最後であることを表し、話し手と聞き手双方に *manifest* な位置である。さらに、Detges & Waltereit (2011)⁴ の見解、“The left periphery anchors the emergent phrase in the foregoing discourse. By contrast, the right periphery is a locus for speaker’s comments on the completed phrase, suitable for fine-tuning the latter’s impact on the audience...” (p.63) (下線部小論の筆者による) (文頭という位置は、先行談話に現れる句 (と後続の句) を結び付ける。一方、文尾という位置は、今しがた述べられた句に対する話し手のコメントに適した位置であり、今しがた述べられた事柄が聞き手に与える影響を微調整するのにふさわしい…) を提示している。下線部から分かるように、文尾は聞き手との関係を

微調整する機能がある位置であると言える。

ただし、文中での位置のみで主観化・間主観化のいずれかが決まるわけではないとも述べており、surely は文頭でも文尾でも間主観的に用いられ、no doubt はいずれの位置でも間主観的には用いられないだろうとする (pp.70-71)。しかしながら、文中での位置と主観化・間主観化の関係には、上記のような傾向はあるようだ述べている。⁵

Aijmer (2002) によると、actually が一連の発話、つまりターンの最後で用いられると、floor-holder の機能を持ち、話し手と聞き手の関係により重点が置かれる。また、ターンの最後ではない文尾でも、主に social function を持つ (p.258)。actually の場合、前言の内容の強さを和らげる丁寧表現となる。⁶

内田 (2011) では、談話標識の機能と文中での位置の関係を論じている。字義的意味や文法上の要因から通例文尾に現れないもの (well, so, and, but, oh, ah, etc.) もあるが (p.102)、actually が文尾で用いられると、“I unexpectedly / contradictly say that…” とパラフレイズ可能で、前言で表された内容に対して留保する機能を持ち、相手の顔を傷つけない程度に反論する (p.105)。⁷

それでは、actually と however の例を見よう。文尾で用いられるのはもっぱら話し言葉に限られ、相手の発言や予想を訂正したり反対意見を述べる場合や、聞き手にとって好ましくない情報を柔らかく伝える場合に用いられて、丁寧表現の機能を持つ。すなわち、聞き手との関係を維持したい話し手の態度を表す間主観的な表現となるのである。通例話し言葉に限られるということは、実際のコミュニケーションの場で生じる機能を果たしていることになる。

次例は、ナイロビ英国高等弁務官事務局長の Sandy に秘書から電話がかかって来た場面である。

- (11) “Something’s come up, I’m afraid, Sandy. I wondered if I might pop down a moment *actually*.” —Carré, *Gardener* (「困ったことが起こってしまったのですが、サンディ。今そちらにお伺いしたいのですが、よろしければ」)

会議中に邪魔することになるので、秘書はより丁寧な物言いをしており、丁寧表現の I wonder if I might と共起している。

次例では、Lesley という警官がナイロビ英国高等弁務官事務局長に対して質問している。

- (12) “Did Tessa confide in anyone, do you know?” Lesley asked, in a by-the-by tone as they all three moved in a bunch toward the door. “Apart from Bluhm, you mean?” “I meant women friends, *actually*.” —Carré, *Gardener* (「テッサは誰かに

本心を打ち明けたのか、ご存知ですか？」3人一緒にドアに向かって歩きながら、ふと思いついたようにレズリーが聞いた。「ブルームの他に、ということかね?」「女友達のことを言っているつもりだったのですが」)

この例でも、actually を文尾で用いることで、相手に対する反論を和らげることになり、高等弁務官事務局長という地位のある人間と警官の対人関係を維持する機能が発揮されている。

次例では、however が文尾で用いられている。(4)と同じく、Anya は皇女 Anastasia で、過去の記憶を失っている。Dimitri は皇女を利用して金もうけを企んでいる。

(13) ANYA: Look, look, I know it's strange, but I don't remember. I have very few memories of my past.

DIMITRI: Hmmm. That's... that's perfect.

ANYA: Well, I do have one clue, however and that is: Paris.—Anastasia [映画台本] (「ねえ、いいこと、私だって(苗字を覚えていないことが)変なのは分かっているわ。でも、覚えてないの。過去の記憶がほとんどないの」〔独り言で〕「(アーニャを悪巧みに利用しているので、その点で)うーむ。こりゃあ...こりゃあ完璧だな」「でもね、手がかりが1つだけあるんだけどね、それがパリ」)

well でためらいの気持ちを表し、続く “I do have one clue” で強めの主張をするが、however を付加することで、主張の力を多少弱めて控えめな態度になる。

5. 感情を表す機能

論理的な関係よりも感情表出的な要素が前景化すると、話し手の不賛成・不快感・反論・疑念などが表され、感情的逆接とも言える応答詞的な機能が生じる。

まず、but の例を見る。次例は、母娘の会話である。

(14) “I know. He says he's exhausted—far too tired to drive. He's decided he needs to spend this weekend curled up with his backlog of work.” ... Now, standing in the airport, Rachel's anger was simmering. “But, this means you'll be alone for Thanksgiving!”—Brown, *Deception* (「そうね、お父さんは疲れ果てていてね、運転できないほど疲れてるって。この週末はやり残した仕事を抱えてソファで丸くなってるしかないって決めたそうよ」... 空港で(電話で話して)たたずんでいると、レイチェルは

怒りがこみ上げてきた。「でも、それだとママは感謝祭を1人ぼっちで過ごすことになるのよ」)

「週末、父親は仕事で自宅に帰れない」ことと「母親が週末の感謝祭を1人で過ごす」ことは、逆接の関係ではなく、〈原因—結果〉の関係にある。それにもかかわらず *but* が用いられているのは、省略した部分で描かれている娘の思考による。永年、父親は仕事を口実に浮気を繰り返してきた。その事実を母親は黙認していた。だから、今回も母親は別に構わないと言うだろう。しかし、父親の行為は許せないという気持ちが *but* に込められ、話し手である娘の強い憤りが表されている。

but で表されるのは、必ずしもマイナスの感情であるとは限らない。

- (15) “I’m getting married.” “*But that’s wonderful!*”—*OALD*⁶ 「結婚するんだ」「いやぁまた、それは素晴らしい!」

この場合は、話し手は予想外に良いことが起こって驚いている。

話し手の強い感情や疑念を表すので、しばしば *but* 以下で疑問文や、(17) でも見られるように感嘆文が用いられる。(16) は検事補と容疑者の会話である。(17) の Mitch は弁護士の卵、Avery は Mitch の法律事務所の上司である。

- (16) “Did you kill her?” “Kill Suzanne? Are you crazy?” “*But you were there?*” “I was not!”—Clark, *Sweetheart* (「彼女を殺したのはあなたですか?」「スザンヌを殺したって? 頭がおかしいんじゃないか?」「でも、現場にはいたんでしょ?」「いるわけないだろ!」)

- (17) AVERY: Hell of a proposal, kiddo. Just redraft this section on repatriation of off-shore funds. I need it tomorrow.

MITCH: Tomorrow? I need another week!

AVERY: Can’t have it, pal. You and I are flying to the Caymans tomorrow morning to take on Mr. Sonny Capps personally.

MITCH: *But* the bar exam!—*Firm* [映画台本] (「すごい提案だぞ、おい。在外投資信託の本国送還に関するこの箇所をちょっと書き直してくれ。明日必要なんだ」「明日ですか? あと1週間は必要ですよ!」「そんな余裕はないぞ、君。君と私はソニー・キャップスと個人的に戦うために、明日の朝ケイマン諸島に飛ぶことになっている」「でも、司法試験が!」)

(16) では、殺人容疑を感情的に否定する容疑者に対して、それをさらに否定する話し手の強い反論が示されている。(17) では、上司の命令に対して、Mitch は「司法試験が（あるから勉強しなければならないので命令には従えない）」と反駁の態度を示しており、それが *but* で表される。いずれも *but* の逆接の意味を残しつつ、話し手の感情的で瞬間的な反応を表している。

強い否定を表す *on the contrary* は、会話で用いられると相手の意見と対立する見解が示される。次例はあるカトリックの組織の司教とヴァチカンの国務長官の会話である。長官は司教に対して、司教の組織をヴァチカンから追放すると告げている。

- (18) “But... that is impossible.” “*On the contrary*, it is quite possible.”—Brown, *Code*
 (「でも..., そんなことができるはずがない」「いや, できます」)

司教は長官の見解を否定し、さらに長官は司教の見解を否定している。司教の発話は *but* で始まり、それに反論する長官の発話は *but* よりも強い否定を表す *on the contrary* で始まっている。

このように *on the contrary* は強い否定を表すので、しばしば単独で応答詞的に用いられる。次例は、国家探察局局員の女性と局長の会話である。

- (19) “Not a problem with one of my gists, I hope.” “*On the contrary*. He says the White House is impressed with your work.”—Brown, *Deception* (「(電話の内容が)私の書いた要旨に関する問題でなければいいのですが」「全く逆だ。ホワイトハウスは君の仕事に感心しているそうだ」)

大統領から君のことで電話があったという局長の言葉を聞いて、女性は不安にかられる。ここでは *on the contrary* によって相手に強い反論をしているが、相手の不安を打ち消す反論なので、結果的に良い意味になる。

6. おわりに

Schiffrin (2001/2004) が指摘したように、談話標識はテキスト内での指示機能を果たすだけでなく、認知的・表出的・社会的機能をも担う。談話標識が実際のコミュニケーションの場で用いられると、単に先行発話と後続発話の関係や談話の構造を示すというよりむしろ、話し手と聞き手の社会的関係に関する機能が重要になる場合がある。逆接の談話標識が示す論理的関係より

も、対人関係を調整する機能が前景化されると、逆接の談話標識が politeness marker として機能することがあり、話し手と聞き手指向の表現になる。逆接の談話標識が文尾で用いられると、先行部分の主張を事実として提示するのではなく、あくまでも話し手の意見であることを示して、留保の態度が表される。また、逆接の談話標識の感情の側面が前景化されると、応答詞的な機能を担う。

注

- 1 観念構造のレベルでは、ある言語表現は談話的に何らかの結束性及び指示的關係を表すが、基本的には観念構造を形成し、談話標識は観念構造を論理的に結びつける。発話行為構造のレベルとして、発話は文脈的に何らかの発話行為を表し、発話行為構造を形成する。この機能レベルでは、談話標識は発話行為と関わる。発話交換構造のレベルとして、発話が組み合わさって会話の順番連鎖 (turn sequences) を形成し、発話交換構造を生み出す。談話標識はもっぱらそうした発話交換構造と関わりを持つ。こうした談話機能の前提となる首尾一貫性には、談話の生産者及び受容者、そしてその知識体系も関与しており、話し手・聞き手の関係を参与者の枠組みのレベルとして設定している。情報状態のレベルでは、参与者が持つ発話と関連した背景的なメタ知識を情報状態として、談話モデルに組み入れている。
- 2 Traugott (2011: 60) は主観化に関して、“meanings are recruited by Speakers to encode and regulate attitudes and beliefs.” と述べている。
- 3 高田他 (2011: 32-33) によると、間主観化とは意味がより聞き手に焦点を置いたものになるメカニズムで、話し手が聞き手の「自己」へ向けた注意 (認知的・社会的両方の関心を指す) から生じた含意が、時間を経て記号化・明示化するプロセスである。
また、Traugott (2011: 60) では以下のように述べられている：Intersubjectification is recruitment of meanings to express Speaker's acknowledgement of the Addressee and desire to maintain social exchange with the Addressee.” / “(meanings are) once subjected, meanings may be recruited to encode meanings.”
- 4 Detges, U. & R. Waltreit. 2011. “*Moi, je ne sais pas vs. je ne sais pas, moi.* French topic pronouns in the left vs. right periphery.” Abstract of paper presented at IPra, Manchester, July 2011.
- 5 接続詞 though が文尾で用いられる談話標識へと展開して行ったように、but にもその傾向が見られる。Mulder & Thompson と Mulder & Penry では、米国英語とオーストラリア英語の会話からデータを採り、オーストラリア英語では but の文尾用法が確立しており、米国英語はその途上であり、近い将来その用法が確立するだろうとする。さらに、so, and, because, or に関しても同様の展開を見せる可能性を示唆している。
これらは、「文法化」(時間の経過の中で、語彙項目が文法的・形態統語的に新たな立場を獲得し、それまでは示されていなかったか、異なる方法で示されていた関係を示すようになるプロセス) の視点からの見解である (Narrog & Heine (eds.), pp.669-72)。
- 6 この場合、音調は通例上昇調であるが、下降一上昇調も可能 (Aijmer 2002, p.258; 1986, p.123)。
- 7 内田 (2011) では関連性理論を援用して談話標識を論じている。“I unexpectedly / contradictly say that…” とパラフレイズされる場合は、actually は saying という発話行為を制約して、解釈の助けとなる手続き的情報を伝える (p.105)。また、談話標識が文頭で用いられた場合は、推意への制約、

高次表意への制約，概念的な読みのいずれもが可能であるが，文尾で用いられた場合は，高次表意への制約が概念的な読みしかできないとする (p.107)。関連性理論の詳細は，Sperber & Wilson (1995²)，Carston (2002)などを参照されたい。

参考文献

- Aijmer, K. 1986. 'Why is *actually* so popular in spoken English?' In G. Tottie and I. Backland (eds.), *English in Speech and Writing: A symposium*. Stockholm: Acta Universitatis Upsaliensis. 119-29.
- 一. 2002. *English Discourse particles: Evidence from a corpus*. Studies in Corpus Linguistics. Amsterdam: John Benjamins.
- Bell, D. M. 1998. 'Cancellative discourse markers: a core/periphery approach.' *Pragmatics*. 8(4), 515-41.
- Biber, D., S. Johanson, G. Leech, S. Conrad and E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.
- 萩原孝恵. 2012. 『「だから」の語用論：テキスト構成的機能から対人関係機能へ』東京：ココ出版。
- Haselow, A. 2011. 'Discourse marker and modal particle: The functions of utterance-final *then* in spoken English.' *Journal of Pragmatics*. 43, 3603-23.
- Jucker, A. (ed.). 1995. *Historical Pragmatics. Pragmatic Developments in the History of English. Pragmatics and Beyond* ns.35. Amsterdam: John Benjamins.
- 松尾文子. 2007. 「談話辞 *but* の用法の展開と対応する日本語」『六甲英語学研究・小西友七先生追悼号』10, 241-55.
- メイナード K. 泉子. 2004 『談話言語学』東京：くろしお出版。
- Mulder, S. A. and J. Thompson. 2008. 'The grammaticalization of *but* as a final particle in English conversation.' In R. Laury (ed.), *Crosslinguistic Study of Clause Combining: The Multifunctionality of Conjunctions*. Amsterdam: John Benjamins. 179-204.
- Mulder, S. A. and W. C. Penry. 2009. 'Final *but* in Australian English conversation.' In P. Peters, P. Collins and A. Smith (eds.), *Comparative Grammatical Studies in Australian and New Zealand English*. Amsterdam: John Benjamins. 337-58.
- Narrog, H. and B. Heine (eds.). 2011. *The Oxford Handbook of Grammaticalization*. Oxford: Oxford University Press.
- Schiffrin, D. 1987. *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 一. 2001/2004. 'Discourse markers: language, meaning and context.' In D. Schiffrin, D. Tannen and H. E. Hamilton (eds.). *The Handbook of Discourse Analysis*. Oxford: Blackwell. 54-75.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1995². *Relevance: communication and recognition*. Oxford: Blackwell.
- 高田博行, 椎名美智, 小野寺典子 (編著). 2011. 『歴史語用論入門：過去のコミュニケーションを復元する』東京：大修館。
- Traugott, E. C. 2011. 'On the Function of Adverbs and Certainty Used at the Periphery of the Clause.' 『語用論研究』13, 55-74.
- 内田聖二. 2011. 『語用論の射程：語から談話・テキストへ』東京：研究社。

Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English. London: Oxford University Press.
2000⁶.

引用作品 ([] 内は本文中の略号)

* 小説

Brown, D. *The Da Vinci Code*. 2003. [Code]

—, *Deception Point*. 2001. [Deception]

Carré, J. le. *The Constant Gardener*. 2001. [Gardener]

Clark, M. H. *Let Me Call You Sweetheart*. 1995. [Sweetheart]

Cornwell, P. *Body of Evidence*. 1991. [Body]

Grisham, J. *The Firm*. 1991. [Firm]

* 映画台本

Anastasia. 1999. [Anastasia]

Cast Away. 2001. [Cast]

Ever After. 2000. [Ever]

The Firm. 1997. [Firm]

Thirteen Days. 2001. [Days]

Total Recall. 1990. [Total]

Working Girl. 1989. [Girl]